

# 藤原宮跡・京跡の調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1992年度には、藤原宮跡内で10件、京跡内では10件の調査を行った(22頁の調査一覧参照)。宮跡内の調査は内裏西外郭地区と東方官衙地区での計画調査および西方官衙地区南部での事前調査のほかは小面積の事前調査である。京跡内では雷丘北方遺跡の調査を継続し、懸案であった本薬師寺跡の計画調査を本格的に開始した。以下、主な調査の概要を報告する。

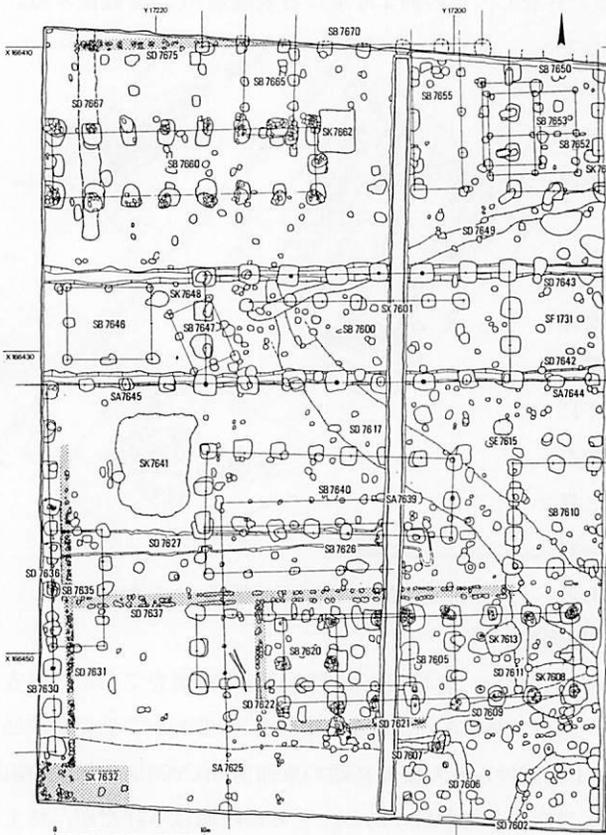
## 1 藤原宮跡の調査

**東方官衙地区の調査(第67次)** 内裏に東接する官衙地区は東西約66m、南北約72mの規模の官衙が、間に幅約13mの東西道路を挟んで南北に4区画、縦列配置されることが明らかになっている。この調査はすでに区画の東北隅(第41次)と西南隅(第61次)が判明している南第二官衙の内部を対象とし、官衙建物の構成と配置の検討を目的とした。検出した遺構は弥生時代から中世に及び、藤原宮官衙の遺構群とその前後の時期に大別される。

藤原宮以前では弥生時代の斜行溝SD7617、古墳時代の掘立柱建物SB7647・7653、素掘溝SD7602・7649、井戸SE7615があり、井戸からは古墳時代初頭の良好な一括資料を得た。

藤原宮直前期の遺構には宮内先行条坊の四条々間路SF1731とその両側溝、掘立柱建物SB7626・7635、土坑SK7608がある。四条々間路は路面幅約6m、側溝心々距離は6.9mで従来の所見と同じである。掘立柱建物は北でやや東へ傾き、北の柱筋を揃えている。

藤原宮期の官衙建物は四条々間路を廃してその上に建てた正殿SB7600とその南側柱に取り付く塀SA7644・7645で区画される。正殿は桁行7間、梁行3間の東西棟で内部には東西塀状のSX7601があり床張りの可能性がある。官衙区画の中心は正殿の中央ではなく南側柱の西から4番目付近にあり、正殿の周辺



東方官衙地区調査遺構図(1:500)

にはその東西の妻柱と柱筋を揃えた SB7610・7650, 7620・7670が配され、正殿と諸建物とはそれぞれ等距離 (5.4m あるいは15m) にある。土坑 SK7641・7651はともに藤原宮の瓦を含み、前者の炭化物層から出土した郡里表記の荷札木簡によって、大宝令制下に埋められたことが判明し、後者は後述の建物 SB7650によって壊されている。

藤原宮期以後の遺構は建物方位の違いから3期に細分される。北で西に傾く大規模な建物群 SB7605・7630・7655・7660は、柱抜取穴に玉石が詰め込まれる特徴から、玉石敷と石組の雨落溝を伴うとみられる。石敷 SX7632は西南部に遺存するだけであるが、各所に石の敷かれた痕跡が確認され、この時期の建物周囲は全面が石敷であったと考えられる。SB7605は広い西庇のつく建物で身舎の中央に間仕切があり、南・西・北に石組溝 SD7621・7622・7637が配される。SD7637は西走して南北棟 SB7630の東雨落溝 SD7631に流入する。SB7660・7655は柱筋が揃い、調査区北端の東西石組溝 SD7675は調査区外にある建物の南雨落溝である。これらの廃絶時期は SD7637の側石抜取り跡出土土器から10世紀以前と考えられるが、造営時期については郡表記の木簡が出土した土坑 SK7641を覆って石敷が遺存することや建物方位が宮期のそれと異なること、SB7605が広庇をもつこと、周辺に奈良・平安時代の石組溝や暗渠があることから藤原宮期以降と考える。しかし、厳密には相対的に新しいことが確認されたにすぎず藤原宮期の中での建て替えの可能性が残る。官衙区画施設との関係を含めた周辺の成果を待って再考したい。北で東に振れる建物 SB7640の年代も確証がないが、左京六条三坊で検出された奈良時代の建物群が同様の方位をとる点から奈良時代に属する可能性が高い。

藤原宮の官衙建物配置は従来、長大な建物の直列・並列配置が特徴とされてきたが、今回、区画中央に東西棟正殿を配し、その両翼から延びる掘立柱塀によって内庭を形成する例を初めて確認した。この違いは官衙の性格を反映したものと理解される。また、石敷を伴う建物群は大規模で整然とした配置にあり、官衙の性格やその変遷の解明にとって重要な意味を持つ。

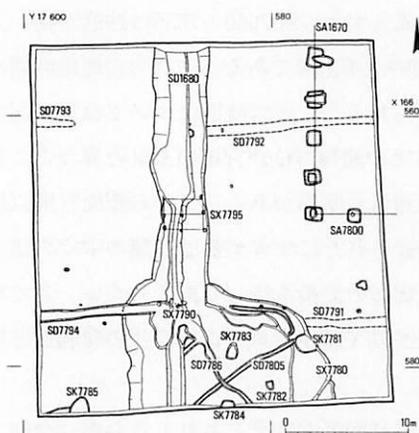
**内裏西外郭地区の調査 (第70次)** この調査は当該地区の西南隅部の様相を明かにし、南面区画施設を確認することで、内裏外郭の南北規模を確定することを目的とした。

遺構は藤原宮期とその直前期に大別される。宮直前期には宮内先行条坊の四条大路があり、道路心が内裏南外郭塀とほぼ一致する位置で検出された。南北両側溝とも痕跡的ではあるが、北側溝 SD7792・7793は幅0.5～1m、南側溝 SD7791は幅0.7mで、両側溝心々距離は約16m。

藤原宮期の遺構には内裏西・南外郭掘立柱塀、内裏西大溝と堰・橋・池状施設や斜行溝、土坑などがある。内裏西外郭塀 SA1670は柱間約3mで4間分を確認し、東折して南外郭塀 SA7800となる。南外郭塀は宮の南北2等分の位置にあり東へ約30mの位置で朝堂院回廊の西北隅にとりつく。これによって内裏外郭の規模は東西303m、南北378mと確定した。

西大溝 SD1680は幅4m前後、深さ1m以上の素掘り溝で、東岸が SA1670の西約9mにある。内裏東外郭の東大溝 SD105に対置される宮内の基幹排水路である。溝は上下2段に掘られ、下段の溝は幅1.5m、深さ0.6～0.9mであるが、上段の溝は溝の中程に設けられた堰 SX7790の上

流(南)側と下流(北)側とで大きく異なる。上流側は上段溝の両岸が広がり、東西16m、南北10m以上、深さ0.2~0.4mの池状遺構SX7780となり、中に下段溝と斜行溝SD7786がある。下流側は橋SX7795までの間は下段溝は幅1m、深さ0.6mで直線的であるが、以北は溝幅3mの深い溜りとなる。堰SX7790は西大溝を横断するように2本の丸太(径12cm)を0.3mの間隔で立て十数個の石を絡ませて配列した構造で、下流側に散乱した石などからみると、堰は粘土を混じえた石積みであり2本の丸太は樋門に関連するものかも知れない。橋SX7795は東西2間、南北2間の掘立柱で、東西3.2m、南北2.6mの橋脚に復元され、その位置から先行条坊の四条大路を踏襲した東西の宮内道路が復元される。宮内道路の南側溝SD7794は先行条坊南側溝に重なり、東流して西大溝へ合流する。



内裏西外郭地区調査遺構図(1:600)

出土遺物には木簡、瓦類、土器類があるが、なかでも西大溝下層の鉄釘に関する文書木簡や荷札が目される。また、西大溝・池状遺構の埋土から多数出土した瓦類は、その多くが高台・峰寺瓦窯産の軒瓦、粘土紐巻き付け技法の丸・平瓦であるなど大極殿・朝堂院地区や内裏外郭地区に共通する内容を持ち、内裏外郭堀が瓦葺きであることを示す点で重要である。なお、広端側に浅い顎をもうけた特殊な形態の平瓦があるが、内裏外郭堀西南隅の入隅部に用いられた谷樋瓦である可能性が高い。類例は平城宮内裏北外郭(平城宮第20次調査)にある(37頁参照)。

**宮南面西門・内濠・外濠の調査(第69-4次)** 歩道整備工事に伴う宮南面西門想定位置の調査であるが、南面西門については基壇土などの痕跡は全く認められなかった。南面内濠SD502は幅1.6m、深さ1mで、3層に分かれる堆積層の上・中層からは瓦類が、下層からは土器や木簡が出土した。木簡には表裏に「封 □」「粟道宰熊鳥□」と書いた検封木簡がある。外濠については外濠に向かう傾斜面を検出しただけで、ほかに宮内先行条坊西一坊大路の西側溝にあたる幅1.2m、深さ0.3mの南北溝SD7758と、2×2間以上の掘立柱建物を検出した。

**西方官衙地区の調査(第69次東西,他)** 宮西南部の市営住宅建替えと個人住宅建設に伴う調査である。検出した遺構は藤原宮期とその直前期のものに大別されるが、これまでこの地区ではいずれの時期も大規模な建物を検出しておらず、この点は今年度の6件の調査も同様である。藤原宮期直前の遺構には第69次西区の先行条坊西二坊々間路SF1082の東側溝があるが、西側溝は削平されたと考えられる。藤原宮期の建物には69次東区のSB7730、7722、7720があるが、いずれも梁間2間で、SB7720が北で西へ約5度傾く桁行3間(16尺)の建物であることが判明する外は一部を確認しただけである。第69次東区の井戸SE7700は幅約50cm、厚さ3cmの板4枚からなる縦板組の井戸で、底から小型の土師器甕が出土した。

なお、下層の四分遺跡については、第69次東・西区内で竪穴住居、井戸、柱穴、溝を検出した。検出した住居・柱穴は弥生時代中期中葉～後葉の時期であり、溝は中期後葉であることから、この間に居住地をかえるという土地利用形態の変化が認められる。

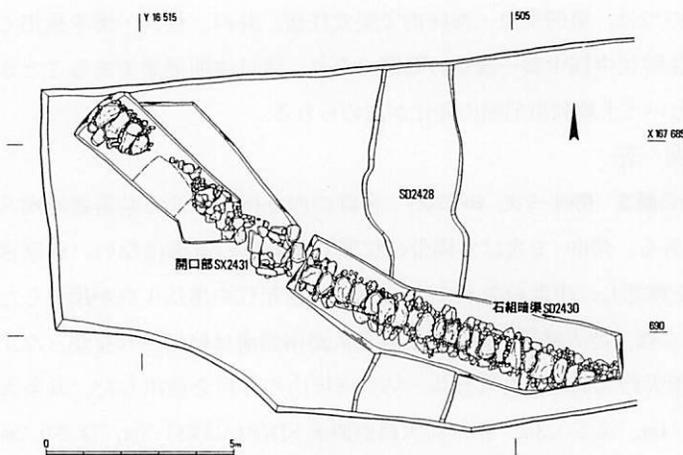
## 2 藤原京跡の調査

**宮外周帯および右京五・六条三坊の調査 (第69-9次, 69-12次)** 宮跡の西を南北に通る県道豊浦南八木線の建設に伴う事前調査である。第69-9次は外周帯に位置し藤原宮の遺構はない。藤原宮期直前の総柱建物や中世の溝を確認し、中世の溝 SD7687からは7世紀代の埴仏1点が出土した。第69-12次では南半に想定された西二坊大路東・西側溝と五条大路南側溝は検出されなかったが、北半で西二坊大路西側溝と五条大路北側溝、右京五条三坊東南坪内の井戸を検出した。五条大路北側溝 SD7846は幅1.2m～1.4m、深さ0.3m、西二坊大路西側溝 SD7845は幅1.3m、深さ0.2mである。井戸 SE7851は径2.5m、深さ2.6mの円形掘形で、井戸枠抜取り穴から藤原宮期の土師器甕、須恵器壺、曲物などが出土した。土師器甕の体部から頸部には粗く編んだ草蔓が遺存した。下層の四分遺跡については、南半で中期前葉～中葉の土器を主体とする幅2.6mの南北大溝を検出し、中期段階の遺跡西限と推定された。北半で検出した溝6条と土坑・柱穴のうち、斜行溝 SD7855・7854は前期中段階、斜行溝 SD7853・7856・7857・7858は中期前半の方形周溝墓を構成し、遺跡の北から北西にかけては墓城であった可能性が高い。

**藤原京条坊関連遺構の諸調査** 右京一条一・二坊の調査 (第69-10次) では西一坊大路、西二坊坊間路を確認した。西一坊大路 SF7491の東側溝 SD7492は幅2.3m、西側溝 SD7493は幅1.6mで、路面幅6.3m、側溝の心々距離は8.4mである。西二坊坊間路 SF7495は路面幅4.6m、東西両側溝の心々距離は5.9mである。西一坊大路東側溝出土土器に、これまで飛鳥地域の石神遺跡から特徴的に出土した東国系の黒色土師器片が含まれており注目される。

右京二条二坊では西南坪の東北部 (第69-1次) で二条条間路南側溝 SD6331から溝心々距離で8m南に位置する藤原宮期の東西溝 SD7740を検出した。また、東北坪から一条大路の推定位置 (第69-5次) で一条大路 SF6250を検出した。北側溝 SD7766は幅1.9m、南側溝 SD7767は幅1.1mで、一条大路は路面幅7.5m、溝心々距離9mとなり、これまでの知見を再確認した。

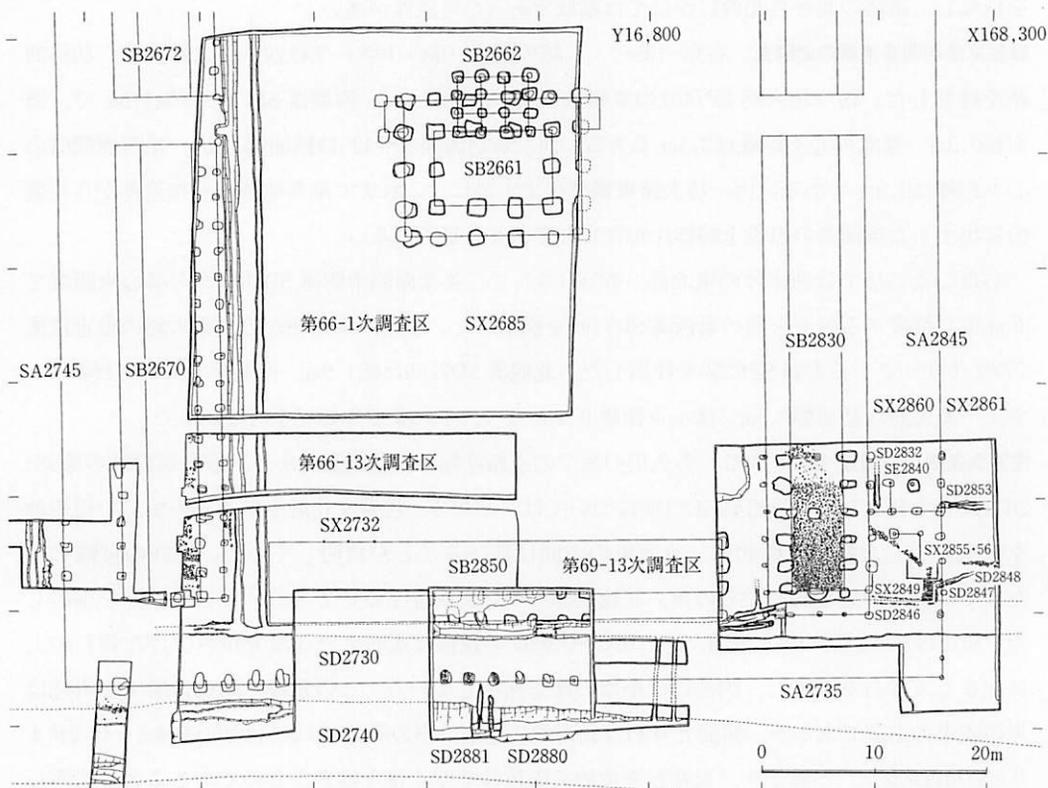
**左京九条四坊の調査 (第69-11次)** 香久山の南での道路拡幅に伴う調査である。道路新設時の第58-20次調査で発見した石組暗渠 SD2430については、その後、埋蔵文化財センターの協力で周辺地を電気探査した結果、西北西～東南東の方向に延びることが判明していた。今回の拡幅にあたっては前回調査を含めてその南、北延長部について調査することとし、都合16m分を検出した。SD2430は底幅0.4～0.45m、深さ0.6～0.65mの規模に玉石2～3段を積み上げた側石の上に大きな天井石を架構し、内部には小型の礫を充填している。この規模・構造に関する所見は先の成果の追認であるが、側面とりわけ北西側の覆土は先の所見 (7世紀中頃の整地と一体で積まれた黄褐色粘質土) と異なり、天井石を含めて灰色砂で厚く覆う特異なものであることが判明した。暗渠内部が全て礫で充填され、その隙間には寄生虫卵やゴミの無い水垢が詰まっている特



左京九条四坊調査遺構図 (1:200)

徴からも、これが通常の導水の用を果たすものではなく、香久山南裾の扇状地にあたる暗渠北側周辺部からの水を暗渠を覆う灰色砂で濾すようにして集積し、開口部で汲み上げる施設であることを想定させる。その行方や施工時期、具体的な用途の解明が期待される。

左京十一條三坊の調査 (第69-13次=雷丘北方遺跡第3次) 1991年に発見された雷丘北方遺跡ではこれまでの調査成果から、左京十一條三坊西南坪のほぼ中軸線上にある大規模な四面庇付東西棟建物(正殿)の東方に東脇殿が、南面の区画施設には門が想定された。道路新設予定地内とその南でこの想定を検証を目的として調査を行った。その結果、東脇殿や区画施設をほぼ想定通り

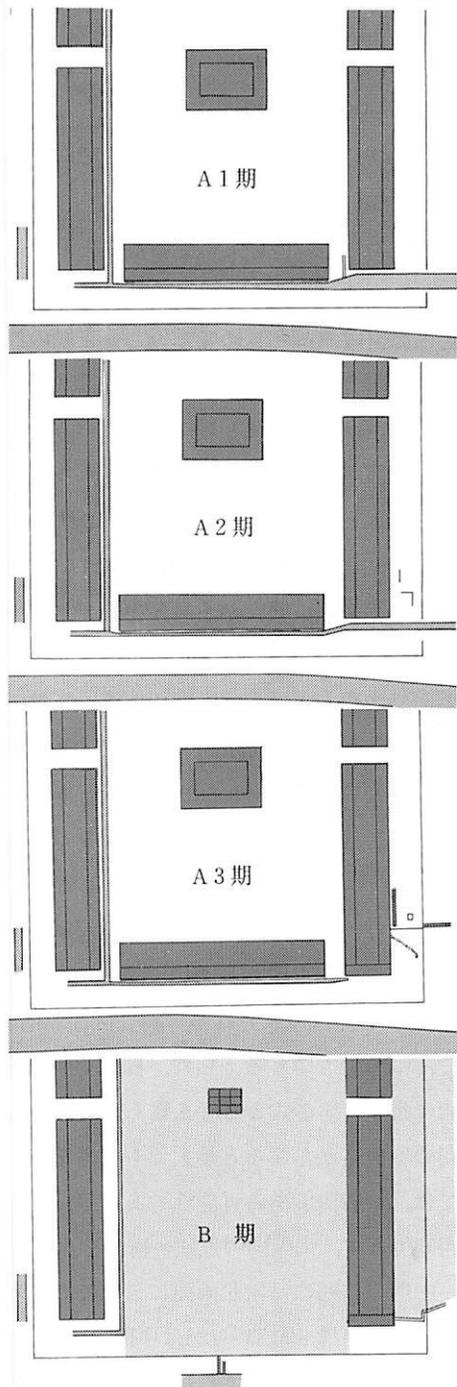


左京十一條三坊調査遺構図

の位置で検出したが、門の遺構は確認されなかった。また、遺跡の南東部での細かな造替の様相から、A1～3・Bの大別2時間、細別4時期の変遷が確認された。

東脇殿 SB2830は東西両庇付の南北棟建物で、規模は西脇殿と同様の身舎が17×2間と推定される。柱間寸法は身舎2.4m等間、庇の出2.1mで、身舎の3・5間目に間仕切りがある。身舎内部には玉石敷があり吹抜けの建物とみられる。西庇の西には西雨落溝 SD2836があって、南の東西溝 SD2730に流れ込む。東西棟建物 SB2850は東妻柱列と南側柱・庇柱列の一部を確認したに過ぎないが、東・西脇殿の南妻と揃えた南庇付建物であり、第2次調査区の3本の柱 SX2732を北側柱の一部とすると、梁行2間で柱間は2.4m等間、桁行は17間と推定され、西・東脇殿とはそれぞれ4m離れて中央部の南を塞ぐ位置を占めることになる。東脇殿の東6.5mにある南北塀 SA2845は中心区画の東限塀で、南端で南限の SA2735と接続する。9間分を検出したが、SD2730が通る南から3間目が4.3mと広く、それ以南は柱間1.7mで円形小型の柱掘形、以北は長方形掘形で SB2830と柱筋が一致する。東塀 SA2845と東脇殿 SB2830との距離(6.3m)は、西塀 SA2745と西脇殿 SB2670との距離(5.2m)より大きい。東脇殿の南5.6mにある南限塀 SA2735は総長約78m(265尺)となる。南限塀の中軸線付近には門が検出されなかったが、簡単な出入口が存在した可能性は残されている。南限塀と脇殿との間の東西溝 SD2730は幾度かの改作があるが、A1期の SD2730Aは SB2850の南については幅狭く、SB2830の東側柱筋以東では幅3～3.5mと広がる。南塀の南の東西溝 SD2740は東方で塀から離れる方向にのび、区画中軸線付近に橋の存在した形跡はない。

遺構のその後の変遷は、A2期には SD2730の南岸を埋めて石で護岸することで幅狭くし、



左京十一條三坊遺構変遷図(1:1500)

SA2845とSB2830の間の空間に鍵形の小規模な区画施設を作る。A3期にはSD2730を埋めて東脇殿に南庇を付ける一方、先の空間には溝SD2832・2853、井戸SE2840、石敷施設SX2855・2856を設けて庭園状とする。さらに、正殿が小規模な建物に変えられるB期にはSB2750を撤去した跡地を含めて南半一带を粗い礫敷SX2685とし、SD2740の北半を埋めてSA2735からの排水の暗渠SD2880・開渠SD2881が造られる。SB2830南端の東にはSD2846・SD2847・礫瓦敷施設SX2849を造り、それ以北は礫敷SX2860とする。SA2845の東側にもSD2848が造られ、以北に礫敷SX2861が施される。

遺跡の性格については建物規模、形態、出土遺物などからは宮殿あるいは官衙である可能性が強いものの不明な点が多く決し難い。建物配置からは正殿の北に後殿の存在を想定すると飛鳥稲淵宮殿遺跡と極めて類似し、正殿の四周を長大な建物で囲む形に推定されるならば、石神遺跡A-3期(斉明朝)の東区画に似た配置となる。いずれにせよ中央部の建物群は左京十一條三坊の西南・西北の2坪を占めており、建物群の南方と北方には相当の空間がある。今回の調査で南面中央部に門や橋が検出されなかったことは、南方に一体性の強い関連施設を想定することを難しくする側面もあるが、これらの解明には周辺部分の継続的な調査が必要である。

**本薬師寺中門・南面東回廊の調査(右京八条三坊)** 昨年度の金堂跡基壇周辺での予備的調査を承け、中門跡と南面東回廊跡を対象として本格調査を開始し、伽藍中軸線の確定と藤原京条坊との関係の解明を期した。遺構の残存状況は概して良好で、現地表面下約50cmの造営に伴う整地土の上面で中門・南面東回廊と雨落溝、石敷、参道などを検出し、その直下で中門の造営に先行する藤原京西三坊々間路SF2740とその両側溝、土坑などを検出した。

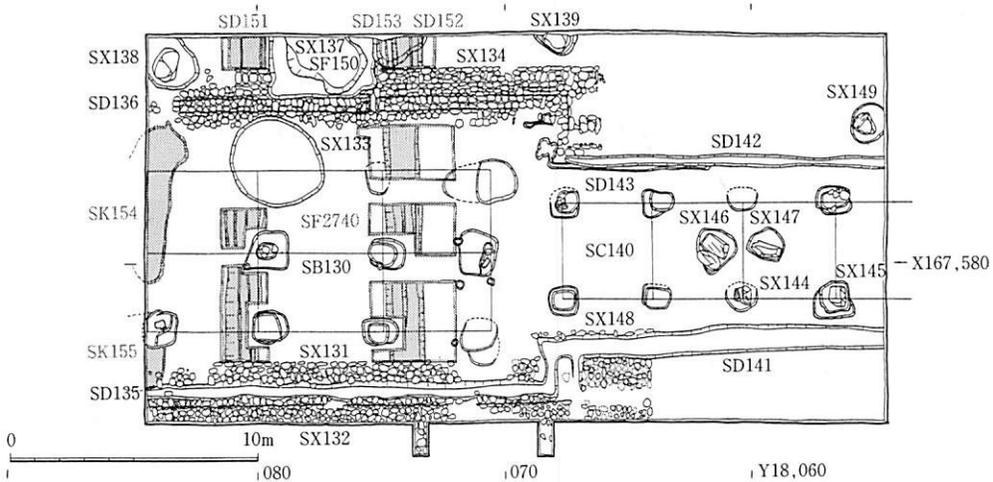
中門SB130は検出した9個の礎石据付・抜取穴から、桁行3間、梁行2間であり、桁行は総長47尺、柱間寸法は中央間17尺(5m)、両脇間15尺(4.43m)、梁行は総長22尺、柱間寸法11尺(3.25m)等間に復原される。これは間口5間の平城京薬師寺の中央3間分の規模と一致する。基壇は外装が完全に失われているが凝灰岩を使用した形跡があり、規模は後述する雨落溝・犬走りの規模から南北長29尺(8.55m)、東西長55尺(16.23m)で、基壇の出は平・妻側ともに3.5尺(1.03m)に復原される。調査区西北隅の土坑の花崗岩製礎石は直径1~1.2m、厚さ約75cmで、中門のものと考えられ、柱座や地覆座などはない。雨落溝が直線をなすことから階段は外側に張り出す形式とは考え難く、内側に切り欠く構造としても礎石の厚さから復原される60cm弱の基壇高からすると最大でも2段を越えない。以上の成果から想定される中門の意匠については、重層門である可能性もあるが、2層目にのみ入母屋の屋根が付く楼門であった可能性も否定できず、南大門の意匠・構造を含めた全般にわたる詳細な検討が必要である。

中門の周囲には南北両面に二重にめぐる石敷と、石敷に挟まれて矩形に折れ曲がる石組溝がある。石組溝SD135・136は中門の雨落溝で、その内側の石敷SX131・133は中門基壇の外周をめぐる石走到りに相当する。また外側の石敷SX132・134は、中門周辺の化粧石敷と門の南と北に延びる参道の舗装石敷である。北面の石組溝SD136は幅60cm、深さ約25cmで底石を敷くが、底

石面には小礫が薄く堆積する。南面雨落溝 SD135は北側石が抜き取られているが、側石1石の石組溝でSD136と同規模と思われる。雨落溝は南面東回廊 SC140の取り付く東面部分も幅60cmとみられ、その場合、中門側柱心から雨落溝心までの距離は平側、妻側ともに約8.5尺と等しくなる。南の石敷 SX132は、東端が南面東回廊の西2列目の柱筋にほぼ揃う位置にあり、幅90尺(約26.5m)で南大門まで延びていた可能性がある。北の石敷 SX134は幅4.5尺(1.33m)で北面雨落溝をコの字型に取り囲む。SX134の北縁に直交して遺存する玉石 SX150は中門の柱筋に揃う位置にあり、これを東の縁石として SX134の北から中門の中央間と同じ幅(約5.1m)で金堂に通じる参道が復原できるが、完全に失われている。

南面東回廊 SC140は単廊で、柱間寸法は桁行梁行とも12.5尺(3.7m)等間て3間分を検出した。礎石は2カ所で原位置を保ち、ともに上面の平坦な自然石で柱座や地覆座などはない。他の柱位置では据付痕跡と礎石抜取痕跡を検出し根石が遺存する。回廊基壇は玉石1石での外装で、基壇外装の玉石列が直接雨落溝の内側石を兼ねる形式である。SC140の雨落溝の幅は中門雨落溝と同じく60cmで、回廊の基壇幅は25尺(7.4m)、基壇の出は6.25尺に復原できる。また後世の溝に凝灰岩の屑が含まれており、回廊基壇にも凝灰岩が用いられた時期が想定される。

中門造営時に施された整地土の直下で検出した西三坊々間路 SF2740 は側溝心々距離約6mで、道路の中軸線は中門のそれとほぼ一致する。また、SF2740の東側溝 SD152に重複する素掘溝 SD153からは本薬師寺式の軒平瓦(6646F型式)が出土しており、この溝は寺域の設定に伴う SF2740の廃絶後に開削され、中門の造営工事の直前まで存続した暫定的な排水路と考えられる。以上の成果による限り、藤原京の条坊は中門の造営以前に施工されていることは明白である。ところが、1976年度の寺域西南隅部の調査では西三坊大路東側溝が本薬師寺の瓦を含む南北溝よりも新しい重複関係にあることが確かめられて、本薬師寺の寺域は西三坊大路の施工に先立って設定された可能性が高いとされている。本薬師寺と条坊の施工過程については、寺跡全



本薬師寺中門・南面東回廊調査遺構図(1:300)

体の造営手順を含めた再検討が必要となってきた。なお、土坑 SK154は7世紀後半代の土器片と炭化物とを多量に含み、寺域の設定以前の西南坪内の宅地に関わるとも考えられる。

本薬師寺中門と平城薬師寺中門との関係については、①平側の軒の出が平城薬師寺が10尺以上であるのに対し、本薬師寺では8.5尺であること、②奈良時代の瓦が出土し平城遷都後にも中門で瓦の差し替え等の維持管理が行われていたと推定されること、③本薬師寺の回廊は単廊であり、複廊として完成した平城薬師寺は全面的新築であった可能性が高いことなどからすれば、中門を移築した可能性は殆ど無い。ただし、これはあくまでも中門に関する所見であり、金堂・塔などを含めた移築非移築論の決着は今後の調査の進展を待ちたい。(西口寿生)

調査地区	遺跡・調査次数	調査期間	面積	備考	調査要因
6AJF-C・D	藤原宮 第67次	91.4.17~93.4.6	2000	東方官衙地区	国計画調査
6AJG-T・U	藤原宮 第69次東	92.6.8~92.7.29	620	西方官衙地区	市住宅立替
6AJL-E・F	藤原宮 第69次西	92.8.6~92.10.7	820	西方官衙地区	市住宅立替
6AJF-T・U	藤原宮 第70次	92.9.30~92.11.27	750	内裏西外郭地区	国計画調査
6AJQ-F	藤原京 第69-1次	92.4.13~92.4.16	72	右京二条二坊	個人住宅建設
6AJE-Q	藤原京 第69-2次	92.4.24~92.5.1	24	右京二条一坊	個人住宅建設
6AJD-H	藤原京 第69-3次	92.5.19~92.5.20	12	左京六条三坊	個人住宅建設
6AJH-Q	藤原宮 第69-4次	92.8.5~92.8.25	95	宮南面大垣外濠	市歩道建設
6AJP-R	藤原京 第69-5次	92.8.27~92.9.3	60	右京二条二坊	個人土地造成
6AJH-P	藤原宮 第69-6次	92.9.16~92.9.16	4	西方官衙地区	個人住宅建設
6AJH-P	藤原宮 第69-7次	92.9.16~92.9.17	7	西方官衙地区	個人住宅建設
6AJH-P	藤原宮 第69-8次	92.9.16~92.9.16	4	西方官衙地区	個人住宅建設
6AJM-A・B・C	藤原宮 第69-9次	92.10.13~92.12.2	580	宮西外周帯	県道路建設
6AJP-R/6AJQ-C	藤原京 第69-10次	92.11.9~92.11.13	42	右京一条二坊	県歩道建設
6AMF-B	藤原京 第69-11次	92.11.17~92.12.7	230	左京九条四坊	市道路拡幅
6AJL-D・E・F	藤原宮 第69-12次	92.12.3~93.4.21	729	宮西外周帯	県道路建設
6AMH-J・Q	藤原京 第69-13次	92.12.8~93.3.15	850	雷丘北方遺跡3次	県道路建設
6AJD-H	藤原京 第69-14次	93.2.25~93.3.2	35	左京六条三坊	個人住宅建設
6AJG-T	藤原宮 第69-15次	93.3.16~93.4.15	230	西方官衙地区	市住宅立替
6AMH-F	山田道 第5次	92.8.10~92.9.28	440	雷丘東方遺跡	県道路建設
6AMY-D	本薬師寺1992-1次	93.2.25~93.4.15	450	中門・南面東回廊	国計画調査
6AMD-U	石神遺跡第11次	92.7.8~92.12.22	680	西区画	国計画調査
5AOH-I	小墾田宮1992-1次	92.9.25~92.10.1	18		個人納屋建設
5AKB-B	飛鳥寺南方遺跡	92.12.1~93.3.10	245		県下水道建設
5BAS-T	飛鳥寺 1992-1次	92.7.6~92.9.10	270	寺域東南部	個人住宅建設
5BOQ-N	奥山麿寺1992-1次	93.2.8~93.2.12	25	西回廊	個人住宅建設
5BST-M	坂田寺 第8次	92.4.7~92.7.23	330	西回廊西方	個人住宅建設

1992年度 飛鳥藤原宮跡発掘調査部発掘調査一覧